

新たな挑戦

肥料や薬品に依存しない、持続可能な農業への挑戦が始まっている。

株式会社クリスタル
代表取締役社長 **木下正義**

ウガンダで始めた新たな取り組み

1997年7月に自然の中で育ったコーヒー豆を求めて見果てぬ地ウガンダ共和国へ渡り、人生の半分以上をウガンダと共に歩んできた。途上国でのビジネスの難しさを肌で感じるとともに、国内外問わず多くの人々と出会えた23年間でもあった。そして2020年、これまでの経験を踏まえてウガンダで新たな挑戦を始めた。

前ウガンダ駐日大使ビリグア氏の協力の下、「UCAP (UGANDA CRYSTAL AGRICULTURE CORPORATION.)」を設立。同国で自然栽培農産物の普及、栽培、加工、販売、輸出を行う。目的は、生産者に対する職業能力の開発および雇用機会の拡充。特に貧困や教育、結婚、出産、病気など、開発途上国の女性を取り巻く課題の多くはジェンダーに起因する不平等が背景にあることから、女性を中心とした農業に重点を置いた活動に力を注いでいく。

(1) バニラビーンズ栽培で脱貧困

ウガンダにあるブコメロ地区でバニラビーンズ栽培の普及活動を開始した。始まりは同地区の生産者を支援している福岡のNPO法人のこんな一言から。「一般的な野菜や果物を作っても生産者の生活は一向に豊かにならない」。

同団体が支援するブコメロ地区では主にトウモロコシ栽培が行われている。だが、トウモロコシの現地取引価格はとても安価でキロ当たり

日本円で10円程度。また、水分量が高い作物のため長期保存に向いておらず、収穫した半分以上が破棄されるなどの問題に直面していた。トウモロコシは生活に欠かせない大切なものではある一方で生産者の生活を成り立たせるためには世界の食料需要を考慮しながら、より付加価値の高い作物をつくらなければならない。

世界、食料、需要、高付加価値……、その時、私の頭の中に浮かんだのが「バニラビーンズ」。現在、世界的に需要が高まり高値で取引されている。もともと同国でも広く栽培されていることを知っていた私は、同団体が支援する生産者のトウモロコシ畑の一部を開墾し、バニラビーンズの栽培を行うことを提案。18年3月、300株の苗が植えられた。20年7月現在、苗は順調に育っており、21年には収穫が始まる予定である。同時にブギス地区(当社のコーヒー豆契約農園)での栽培も行って、すでに600キロほどの収穫が始まった。

(2) ハーブ栽培でジェンダー格差改善

神奈川を拠点に置くNPO法人とのハーブ栽



バニラ収穫風景



収穫直後のバニラビーンズ

培、アロマ製品普及活動を開始。同団体ではウガンダでハーブの一種であるレモングラス栽培による環境保全(改善)および収入向上を目指す活動を行っている。

ハーブの利点は、やせた土地でも栽培が可能であること。しかし、現地で作られたハーブやアロマは先進国で使用されているものに比べるとその質が大きく劣る。今後は当社が国内農業で培ってきたハーブ栽培と加工技術を現地の女性農家に提供し、製品化するまでのプロセスを共同で行っていく。

現地で栽培～製品までの工程を一貫して行うことで、雇用の促進と収入の増加が見込める。女性を中心とした農業活動を行い、ジェンダー格差の改善と女性のエンパワーメントの確立を目指す。

(3) 有用微生物で衛生環境を保全

有用微生物とは、光合成細菌や発酵型の乳酸菌、酵母など、自然界にある善玉菌の集合体。現在では世界100カ国以上で使用されている。この有用微生物は日本で開発されたものであり、このたび開発企業のサポートを受けて、ウガンダの環境改善に役立たせていただく運びとなった。



トウモロコシ畑をバニラビーンズ畑に (左端が筆者)

(きのした・まさよし)

中国大連外国語大学留学後、勝原コーヒーに入社。2006年7月に株式会社クリスタルを設立。世界各国の輸入コーヒー生産者家族と豆の製造販売を行っている。

ウガンダの住宅密集地や学校では、そのほとんどが穴に排せつ物を落とすだけのいわゆる「落とし便所」で、そこから発生する悪臭はひどいものだ。すでにユニセフ・ウガンダでの使用が開始されており、難民キャンプや約40校の学校で悪臭対策試験が実施されている。

「命をつなぐ農業」を自然栽培で

農作物には栽培する人の心や思いが大きく影響していると実感させられる。しかし、その栽培法が未来永劫続けられるのかと問われれば、私は疑問を抱かずにはいられない。肥料や薬品に依存しては、未来へつなぐ持続可能な農業を営んでいくことが困難な時代が来るのだと考えている。

アフリカの生産者から聞いた言葉を思い出す。「この地球は神様が私たちに与えたものではない。未来の子どもたちから私たちが前借りしているものだ」。これからの農業には、人と人、人と自然、人と大地のつながり、生かされている意味、いのちの本質につながる広がりや深さが必要だと痛感している。今こそ肥料や薬品に依存した農業をやめて、「未来へつなぐ農業」「生活につなぐ農業」、そして何よりも「食」を通して「命をつなぐ農業」を真剣に考えなければならない。それを可能にするのは、生態系の頂点に立つ私たち人間なのだ。

自然栽培は家族、地域だけでなく、日本も世界も変えていく力をもっている。広く普遍的になれば、最も効率的(自然)な社会がつけられると私は信じている。